

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Images of Japan in early modern England

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 指, 昭博, Sashi, Akihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1496

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



近世イングランドにおける日本像 ——ピーター・ヘイリンを中心に——

指 昭 博

はじめに

エリザベス期から初期ステュアート朝にかけてのイングランドでは、旅行記や地誌といった外国に関する著作が多く刊行されるようになった。旅行の範囲も、ヨーロッパ諸地域はもちろんのこと、トマス・コリアットのように遠くインドを訪れる者まで登場した。こうした著作を通して外国を知ることが、ナショナル・アイデンティティ形成に寄与したことも指摘されているし、アジア旅行記に、早くも帝国主義的な世界観の萌芽を見る向きもある¹。

しかし、こうした旅行記が刊行され、1600年に東インド会社が設立されたとはいえ、近世イングランド人にとって、アジア、とくに東アジアはまだ遠い世界であったことは間違いない。また、当時のイングランド人が抱いたアジア・イメージについては、日本ではあまり研究されていない。イギリス人のアジア観といえば、ヴィクトリア期を中心とした研究が中心となっている²。しかし、優越感と不可分な帝国意識を抱いた19世紀と、アジアに対するある種の畏怖の念のあった近世では、当然、そのアジア観に違いがあったはずである。また、情報の少なかった東アジアについては、虚像といってよいイメージも増幅されたに違いない。東アジアの最東端に位置する日本については、いまだにマルコ・ポーロ以来の伝説的なイメージがイングランド人を引きつけ続けていただろう。

もちろん、16世紀半ばには、日本とポルトガル、スペインとの交渉も始まり、イエズス会を初めとするキリスト教宣教師も多数日本を訪れ、多くの日本

1 Anna Suranyi, *The Genius of the English Nation: Travel Writing and National Identity in Early Modern England*, Newark, 2008; John Parker, *Books to Build an Empire*, Amsterdam, 1965. また、第62回日本西洋史学会大会(2012年5月、明治大学)における Aishwarya Sugandhi (京都大学院生)による発表「Examining Elizabethan Travel through the Lens of Thomas Coryat」(「エリザベス朝の旅行—トマス・コリアットの目を通して」)[司会は筆者]からも貴重な情報を得ることができた。氏はコリアットに帝国意識を見ることには否定的である。

2 東田雅博『図像のなかの中国と日本』山川出版社、1998年などを参照。16、17世紀における日英交渉については、細谷千博・イアン・ニッシュ監修『日英交流史 1600—2000』第1巻(東京大学出版会、2000年)にも論考があり、有益である。ただし、貿易関係など社会経済史的な「リアルな」面の考察が主で、本稿が目指すような日本像のイングランド社会への影響・フィードバックへの関心とは方向性が異なっている。

に関する情報がヨーロッパにもたらされていた。さらには、1582年に日本を発った天正遣欧少年使節団が1584年にポルトガルに到着、翌年にはローマ教皇グレゴリウス13世に謁見している。しかし、すでに宗教改革を経てローマと決別していたイングランドにとって、このカトリック世界の耳目を集めたニュースも身近なものであったとは考えにくい。本稿では、このように日本に関する情報が乏しかった近世イングランドにおいて、日本という異境がどのように理解されたのか、その一端を紹介したいと思う。

1 日本との遭遇

イングランド人が初めて日本人と接触したのはいつのことであるのかは、それほどはっきりしたことはわからない。鎖国以前、16世紀には多くの日本人が東南アジアを拠点に活動——商業もあれば、海賊行為もあった——していたし、インド周辺に到達したイングランド人との接触があった可能性も否定はできない。しかし、たとえ接触があったとしても、それは何らかの情報をイングランド本国にまでもたらすものではなかったことは確かである。

そのような中、1588年、ふたりの日本人がプリマスに到着したことが、イギリス人の航海記録を集成したサミュエル・パーチャスによって記録されている。³日本人がイングランドの土を踏むのは、記録上これが初めてのことになる。もちろん、先の遣欧使節団とは違って、公の訪問といったものではない。ふたりは船乗りで、最初、スペイン船の乗組員であったところを、1587年にメキシコ沖で船丸ごとイングランド船に拿捕された。スペイン無敵艦隊襲撃前夜の緊迫したイングランド・スペイン関係をうかがわせる出来事ではあるが、ふたりはそのままイングランド船の船長トマス・カヴェンディッシュに仕えることになり、無敵艦隊との戦いが終了した直後に、乗船がプリマス港に帰還した。ちなみに、このカヴェンディッシュの航海は、マゼラン、フランシス・ドレイクに続く、世界で3番目の世界周航となったものである。

かれらが最初にスペイン船に乗ることになった経緯はわからないが、当時の日本人の活動範囲からすれば、とくに不思議はないだろう。のちに、ジョン・セイリスが日本に向かった際も、東南アジアで日本人の水夫を船に乗せている。⁴プリマス到着後、初めての日本人の到来ということで、カヴェンディッ

3 パーチャスの著作は大部なものであるが、日本に関する記述を編集した Cyril Wild (ed.), *Purchas His Pilgrimes in Japan extracted from Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes, Contayning a History of the World in Sea Voyages and Lande Travells by Englishmen and others*, Kobe & London, 1939 がある。

4 *Ibid.*, p.126.

シュの縁者であったリチャード・ハクルートのインタビューを受けることになり、その存在が記録されることになった。かれらは、すでにクリストファとコスマスというヨーロッパ風の名前を名乗っていたので、もとの日本名はわからないが、たいへん英語が上手だったと記録されている。年齢はクリストファが20歳、コスマスが17歳であった⁵。

ふたりはその後もカヴェンディッシュに付き従って働いたが、1591年に南大西洋へ向けて出帆した航海を最後に記録から消えてしまう。スペインとの戦闘で命を落としたのかもしれないし、無事イギリスに帰還したのかもしれない。また、別天地で活躍の場を見いだしたのかもしれない。歴史の闇に消えていたかもしれないふたりだが、かれらと出会った人々の記録のおかげで、ほんの数年間だけでも、その存在をわれわれは知ることができる。しかし、運命のいたずらによってイングランドにやって来た船乗りに興味は尽きないが、かれらの存在によってイングランドにおける日本理解がそれほど深まったわけではないだろう。

逆に、日本に最初に上陸したイングランド人は、1600年に大分に漂着したオランダ船に乗っていたウィリアム・アダムスである。もともとは五艘の船団で、マゼラン海峡を越えるコースでアジアとの交易を目的にした航海であったのだが、結局は一艘だけが日本に漂着した。プロテスタント国オランダやイングランドの日本進出を恐れるイエズス会、スペイン、ポルトガルによって、アダムスたちは海賊であるとの讒言を受けるが、取り調べの結果、興味を抱いた徳川家康に接見するため大坂へ送られる。その後、アダムスは家康に仕えて、「三浦按針」の日本名を与えられ、旗本に取り立てられたことはよく知られている。アダムスは、何度も帰国の許しを求めるが、アダムスを重用した家康の許可は下りることはなかった。家康のために西洋式の帆船を二隻造ったり、家康の外交貿易の顧問として働き、1611年には日本との貿易を勧める書簡を東インド会社に送っている。ただし、アダムスの書簡は、途中、イングランドの東アジア貿易への参入を懸念するオランダによって破棄されたり、一部を削除されたりしたようである。現存するアダムスの書簡には、自身が日本にいる経緯を説明し、貿易を勧める内容が主で、日本事情についてそれほど詳しく述べられているわけではない⁶。

アダムスの書簡に応じて、東インド会社が日本に向けて送り出したのが、

5 ふたりの日本人については、越智武臣『イギリスの航海と植民 一』（大航海時代叢書 第II期 17）「解説」、岩波書店、1983年、pp.510-12を参照。

6 アダムスの書簡は、Wild前掲書に2通が所載。また、現存する11通の書簡は、田中丸栄子編訳『三浦按針11通の手紙』（長崎新聞社、2010年）に邦訳されている。書簡をめぐるオランダとの関係はWildに考察がある（pp.80-85）。

ジョン・セイリスとリチャード・コックスである。かれらは、1613年に日本に到着する。ただし、セイリスとアダムスの間には意思疎通に齟齬があり、関係はぎくしゃくしたものであった。アダムスは、家康の所在地に近く、ポルトガルなど先行諸国とは競合しない駿河を貿易拠点とすることを勧めるが、セイリスはアダムスに会う前に平戸に拠点を置いてしまう。セイリスは、アダムスを単なる漂着者と考え、格下の人間と見ていたようで、日本におけるアダムスの地位の高さを理解できなかったし、西洋風ではなく武士の服装をしたアダムスを嫌ったらしい。そのため、アダムスの助言は無視され、日本の事情・文化に疎いセイリスの失敗につながる。セイリスは、たまたま安い小壺が茶道具として松浦家に高価で買い取られたため、日本での有力商品としてロンドンから大量に取り寄せるが、今度はまったく売れなかった。茶人趣味についての無理解とアダムスの助言を無視したことが引き起こした失敗の好例である⁷。

ここで興味深いのが、「現地化」したアダムスへのセイリスの嫌悪感である。後世の露骨な人種観ではないにしても、ある種の他者に対する優越感の反映を見ることができるだろう。その後のイギリスが、帝国内の様々な面で「イギリス的」な世界を維持しようとしたこととつながってゆく意識だろう。

W・アダムスが東インド会社に書簡を送るより前、1604年にはサー・エドワード・マイケルボーンが、国王ジェイムズ1世から、「中国、日本、朝鮮、カンボジアとの交易」を認める特許を得て、航海に乗り出している。グリーンランドと北米大陸の海峡発見やバフィン湾の探検などで知られる一流の航海士ジョン・デイヴィスとの航海であったが、シンガポール近くで日本人の海賊に襲われ、デイヴィスは殺されてしまう。結局、激戦の末、海賊を鎮圧し、21名の日本人海賊が処刑されている。アジアの海での日本とイングランドの最初の実際の遭遇は、悲劇的なものであった。結局、マイケルボーンの航海は失敗に終わり、日本に到達することなく、日本についての新たな情報も得ることはなかった⁸。

1613年にはコックスが平戸に商館を設置し、本格的に貿易を始めるが、オランダの妨害もあって、十分な利益を上げることができず、10年後の1623年、東インド会社は日本からの撤退を決定し、平戸商館は閉鎖される。その後、18世紀になると、再びイギリスは日本との貿易に関心を示して、商館の再開を幕

7 Anthony Farrington, *Trading Places: The East India Company and Asia 1600-1834*, London, 2002, pp.42-47. セイリスの日本航海記は、John Saris, *The Voyage of Captain John Saris to Japan, 1613*, ed. by Ernest M. Satow, [Hakluyt Society, 2nd ser. no.5], London, 1900 (村川堅固、尾崎義訳『セイリス日本渡航記／ヴィルマン日本滞在記』[新異国叢書 第I輯 6] 雄松堂出版、1970年)。

8 Wild, *op.cit.*, pp.77-80.

府に働きかけるが、オランダとの交易で十分と考えた幕府によって拒否され続け、幕末を迎えることになる。

2 近世の記録に登場する日本

では、イングランドに日本についての情報が最初に伝わったのは何時だろう。もちろん、古くからマルコ・ポーロの見聞録は知られていたと思われるが、英文で日本について最初に言及した書物とされるのが、1577年に刊行されたリチャード・イーデンの『東西インド地誌』¹⁰である。著作全体が、ヨーロッパの先行文献の翻訳集成で、イタリア人ジョバンニ・ピエトロ・マッフェイ Giovanni Pietro Maffei のラテン語著作からの翻訳である。初版は1555年に刊行されているが、そのタイトルは *The Decades of the New Worlde or West India* (London, 1555) であって、「東インド」は含まれていない。イーデンの死後、編纂を託されたウィレスによる第2版において、日本についてのまとまった記述が登場する。そこでは、18ページにわたって日本についての記述が見られる。ヨーロッパ人の好む「食用油、バター、チーズ、ミルク、卵、砂糖、蜂蜜、酢、シナモン、コショウ」などはないが、果物は豊富で、豊かな銀山がある。日本人は「信頼でき、秩序正しく、機知に富む」と評されている。仏教や僧侶についての説明も詳しく、葬儀の在り方など、社会習慣の紹介が多いのは、もとになったイエズス会の資料の性格を反映しているのだろう。

マッフェイ自身の情報源は、宣教師アロシウス・フロエス (Aloysius Froes フロイスと同一人か?) からの書簡に基づいている。マッフェイは、のちにルイス・フロイスに有名な『日本史』を執筆させた人物である。ちなみに、フロイスの来日は1563年で、『日本史』の執筆は1583年から始まり、完成は1594年であるが、写本が知られるようになるのは18世紀である。

一冊全部が日本についての記述となっている最初の英語での書物は、イエズス会の日本からの書簡集で、1619年にフランスで刊行されたものの翻訳であった (*A Brief Relation of the Persecution lately made against the Catholike Christians in the Kingdom of Japonia*, [St.Omer], 1619)。ただし、これは表題からもわかるように、カトリックによる出版物で、日本でのキリスト教徒迫害をイングランドで迫害を受けるカトリック教徒に重ね合わせたものであった。当然のことな

9 タイモン・スクリーチ、村山和裕訳『江戸の英吉利熱―ロンドン橋とロンドン時計』講談社、2006年参照。

10 Richard Eden (Richard Willes ed.), *The History of Travayle in the West and East Indies*, London, 1577, fols.251v-260r.

がら、英語で書かれているとはいえ、当時のイングランドで普通に流通した書物とはいえない。

イエズス会の情報は、大陸のようにイングランドでは流通しなかったもので、エリザベス時代に日本についての情報が不足していたことは確かであるが、17世紀に入って、平戸に商館が置かれ、それなりの文物（甲冑なども）がイングランドに渡ってからも、日本認識はあまり深まっていない印象がある。理由としては、平戸商館の活動が10年ほどに過ぎず、その間の貿易船の行き来も不活発であったことや、アンボyna事件以降、東アジアはオランダの領域として、イングランド人が活動・認識する世界からは遠い存在になったことが挙げられるだろう。さらには、日本についての情報の多くが東インド会社内に留め置かれ、公刊されることが少なかったことが大きいだろう。交易量がそれほど大きくもなく、その後、直接伝わる情報が乏しくなれば、正確な日本像が描きにくくなるのは当然である。こういった「遠さ」は17世紀前半の著作にもすでに見ることができる。次節では、そういった地誌の例としてピーター・ヘイリンの著作を取り上げて検証してみるが、その前に、地図情報として日本がどのように伝えられていたのかを確認しておこう。

日本の存在は、マルコ・ポーロの情報によって知られていたもので、ヨーロッパ人の日本到来以前から、ヨーロッパの地図に日本が描かれていた。現存するものでは15世紀半ばの作例もあるようである。もともと、正確な位置や形で描かれるようになるのは、ヨーロッパ人の到来以降である。本稿に関わる時期に限っても、オルテリウスの地図帳にも収載されており、イングランドの航海者や知識人の間では、日本の地理的な位置関係は十分に知られていたと考えて良いだろう。なお、本稿の目的と重なるイギリスにおける地図・地誌上の日本情報については、すでに貴重な先行研究、島田孝右・島田ゆり子『近世日英交流地誌地図年表 1576—1800』（雄松堂出版、2006年）がある。ただし、地理情報・地図に焦点が当てられており、地誌であっても地図を伴わない作品は省略されている。年表形式で地図を紹介するのが主目的であるので、原文紹介も地理情報を中心とした抄録である。次節以降で検証する日本情報を近世イギリス人がどのように受け止めたか、という本稿の目的とは方向性が異なる研究である。

11 Carl Moreland and David Bannister, *Antique Maps*, 3rd ed., Oxford, 1989, p.269; 『西洋人の描いた日本地図—ジパングからシーボルトまで—』（展覧会図録）サントリー美術館／神戸市立博物館他、1993年。

3 ピーター・ヘイリン『世界誌』

ピーター・ヘイリン (Peter Heylyn または Heylin, 1599—1662 年) は、内戦期を生きた、反ピューリタン・国教会擁護の立場の神学者として、『イングランド宗教改革史』(1661 年) やウィリアム・ロードの伝記 (1662 年) などの著作でよく知られる。多岐にわたる旺盛な執筆活動を行い、歴史研究入門といった書物も著している (1641 年)。これまで日本では、反ピューリタンの「保守派」神学者ということもあり、ほとんど紹介されてこなかったが、17 世紀イングランドを代表する大物知識人といってよいだろう。他方、ヘイリンは地誌に関しても強い関心を持ち、彼の処女作は「大なる世界の小さな叙述」という副題を持った『ミクロコスモス (小世界誌)』(1621 年) であった¹²。この著作は人気を博して、1639 年までに 8 版を重ねた¹³。その内容は、客観的な地理情報の羅列というよりは、ヘイリン自身の思想的立場を色濃く反映したものとなっている。

初版は、小型の四折り判で、本文 420 頁。構成は、最初に地理学の概論を置き、参照すべき文献を紹介したのち、ヨーロッパの地誌が述べられる。ヨーロッパの記述が全体の 3 分の 2 を占め、そのあとアジア、アフリカ、アメリカの順で記述されるが、分量はこの順で少なくなっていく。最後のアメリカについては 20 頁足らずである。

初版には、アジアの「東方の島々」の中で、日本についての記述がすでに見られる¹⁴。主な情報源は、欄外注から判断すると、パーチャスのようであるが、地理情報に関しては、日本の大きさを、長さ 600 マイル (960 キロ)、幅 90 マイル (144 キロ)、狭いところは 30 マイル (48 キロ) としている。こういった数値は当時の地理書・地図などにほぼ共通するようである¹⁵。狭隘部が 50 キロ足らずというのは、当時の地図を見ると、琵琶湖が湾のように描かれたものが多く、湖北から若狭湾にかけての部分が最狭部と見なされたのかもしれない。

全部で 66 の国から成り、主要都市として、大坂、豊後、比叡山、都 (みやこ)、高野 (山)、板東の名前を挙げている。都は 21 マイル四方だが、今はその半分しか機能していない、と応仁の乱後の京都の荒廃ぶりを記している。板

12 Peter Heylyn, *Microcosmus, or A Little Description of the Great World, A Treatise Historicall, Geographicall, Politicall, Theologicall*, Oxford, 1621.

13 A.W.Pollard and G.R.Redgrave (eds.), *A Short-Title Catalogue of Books Printed in England, Scotland, & Ireland 1475-1640*, 2nd ed., London, 1986, vol.1, pp.580-581.

14 Heylyn., *Microcosmus*, p.360.

15 島田孝右・島田ゆり子『近世日英交流地誌地図年表 1576-1800』雄松堂出版、2006 年、参照。

東にはパリに匹敵する大学（おそらくは、足利学校のこと）がある。比叡山や高野山は学問の盛んなところ、といった説明がなされている。裕福な家は金で覆われている、というマルコ・ポーロ以来の伝統的な日本イメージも記されるが、マルコ・ポーロの時代以降に建てられた金閣はもちろんとして、当時、秀吉などが築城した城郭には、金箔貼りの瓦などが用いられることが多かった事実を反映しているのだろう。実際、アダムスの書簡でも金箔貼りの建物についての言及がある¹⁶。

土壌や人は中国に似ているが、中国人より迷信深いとする。迷信の例として挙げられるのが、「子どもが産まれたら、すぐに川で洗う」という「産湯」の風習であり、住まいに入る前に靴を脱ぐという習慣である。この「奇妙な習慣」について、ヘイリンは、彼らしい解釈を展開する。いささかこじつけに近いので、文意をとりにくいだが、曰く、中国に対抗して、島の住民は、挨拶の際に靴を脱ぐ。なぜならば、中国では、挨拶の際に帽子を脱ぐからである（つまり、中国に反発して、脱帽とは逆の行為、靴を脱ぐ、を行う）。これは、わが国のピューリタンに似ている。ピューリタンは、カトリック教徒に敵対して、カトリックと異なった振る舞いに及ぶが、その行為には馬鹿馬鹿しいことがたくさんある、といった議論の展開である¹⁷。日本の習俗紹介から、無理な理屈でピューリタン批判に利用している点が、ヘイリンの宗教的立場を如実に示している。

こうした、自国・自文化批判の手段として、異文化を持ち出すことは、啓蒙期の事象として取り上げられることが多い。「高貴な野蛮人」と呼ばれる観念もそのひとつであるが、それはアメリカ先住民などを文字通り「高貴」と評価したというよりは、ヨーロッパ社会の墮落を浮き彫りにする手段であったとされる。イングランドでは、17世紀にアフラ・ベインの『オルノーコ』（1688年）などに例を見ることができるが、ここでのヘイリンの発想は、そういったパターンのかかなり早い例かもしれない。

『ミクロコスモス』は好評であったため、増補がなされ、ついには表題も「小宇宙」から「大宇宙」へと変更される。1652年に刊行された『コスモグラフィ』¹⁸である。小型の初版から、フォリオ版1,100頁を超える大冊へと拡大され、世界の大陸毎の地図も掲載されている。本の構成は、最初に天地創造からの歴史を主題にした地理学概論が置かれるという壮大なもので、以下、第1書と第2書がヨーロッパを、第3書がアジア、第4書がアフリカとアメリカを扱

16 Wild, *op.cit.*, p.99; 田中丸、前掲書、35頁。

17 Heylyn, *Microcosmus*, p.360.

18 Peter Heylyn, *Cosmographie in Four Books*, London, 1652.

う。順序としては初版を踏襲しているが、いずれも情報量は格段の違いがある。当然、日本についての記述も情報量が増加した。ヘイリンが関心を寄せたのは、初版同様、イングランドとは対称的な事象であった。本書も 1682 年までに 6 版を重ねるが、ここでは 1666 年の第 3 版をもとに検証していこう。

まず地理的な情報が充実して、都市名が増えているが、戦乱のため、機能している京都の領域は、その 3 分の 1 であるとしており、初版より面積が小さくなっている。時期的には、江戸時代に入り、京都の復興も進んでいるはずなので、古い情報に基づいていたことがうかがえるが、数値が変更された根拠はわからない。²¹

また、初版ではほとんど無かった歴史的な記述が目立つ。政治的な動きについても、織豊政権期の動向についての記述が加えられている。それなりの理解がなされていたことがわかるが、徳川幕府についての記述は少なく、やはり情報の古さが表れている。秀吉の中国（明）侵攻計画が紹介され、もう少し長生きできれば、征服は成功しただろうという評価まで示している。²²

さて、日英文化比較であるが、初版と同じように、ピューリタンを引き合いに出すのは変わらないが、今日のわれわれも改めて日本独自の風習であったことを認識させられるような興味深い事例が追加されている。基本的にイングランドと正反対のように思われる事例が挙げられている。たとえば、日本では馬に右側から乗る、という事実が紹介されている。現在ならさしずめ自動車のハンドルの位置の違いといった点だが、衣装や刀の扱いなどから考察すれば、興味深い問題に掘り下げられるはずであるが、もちろんヘイリン自身は実見したわけではなく、伝聞情報に基づいて記述しているだけなので、そういった細部への考察は期待できない。

また、葬儀は白色、祝宴では黒色が基調色となっている、といった指摘も興味深い。もちろん、イングランドでは、その反対で、白が祝いの色で、黒が不祝儀の色であるので、正反対だ、というわけである。現在の日本では、葬儀色は黒一色で、白色はかろうじて死装束である経帷子に残るくらいだが、少なくとも戦前までは白色が基調であったことは早くも忘れ去られようとしている。祝宴の黒色はまだ健在だが、花嫁衣装などは白色に「統一」されかかっているように、変化が著しい。白黒の文脈で、お歯黒の習慣についても紹介し、黒い

19 Donald Wing (ed.), *Short-Title Catalogue of Books printed in England, Scotland, Ireland, Wales, and British America...1641-1700*, New York, 1948, Vol.2, p.181.

20 Peter Heylyn, *Cosmographie in Four Books. Containing the Chorographie and Historie of the Whole World, and all the Principal Kingdoms, Provinces, Seas, and Isles thereof*, London, 1666.

21 *Ibid.*, p.916.

22 *Ibid.*, p.917.

歯が美しいと理解されていると述べている。まさに、現在のわれわれにとっても「過去は異世界」という事実を再確認させてくれる事例が紹介されている。²³

イングランドの社会批判につながる事例としては、日本では、放蕩の結果として貧しくなった人はいないので、貧者を（道徳に墮落した者として）厭うことはない。日本では、賭博などが嫌悪されている、といったことが、当時のイングランドでの事情の「正反対」として提示されている。貧民や浮浪者の救貧は、当時のイングランドにとって、大きな社会問題であったが、ここでヘイリンが考える日本の姿は、貧民がいない社会というのではなく、貧者はいるが、社会の中に受け入れられており、高い道徳的な規範が維持されている、そういった世界である。貧民・救貧観と宗教思想の関係は、様々に議論されるテーマであるが、ヘイリンの眼には、予定説に立つピューリタンが理由の如何を問わずに貧窮者を蔑視し、しかるべき理由のある貧者を助けるという伝統的な救貧がおろそかにされているように映っていたのだろう。

こうした文化比較の手法自体は、フロイスなどにも見られるし、イエズス会の宣教師が記録した中南米の古代文化についても同様の視点で描かれていることは、改めて指摘するまでもないだろう。ただ、ここでヘイリンの念頭にあったのは、ピューリタン批判の手段として利用することであった。これは、ヘイリンの視野の狭さを示すのか、したたかな戦略であるのか、その判断は難しい。

4 ロス『世界宗教大全』

日本についての情報が見られるのは、もちろん、ヘイリンの著作だけではない。ここで、もう一点、宗教というテーマに限定はされるが、興味深い例を紹介しておこう。アレクサンダー・ロスの『世界宗教大全』である。²⁴この著作は、いわばピューリタン聖職者による世界宗教の百科事典というべきものである。第2版（1655年）以降の版には、巻末に『悪名高き異端者の提示』*Apocalypsis, or The Revelation of certain notorious Advancers of Heresie* が合本されて刊行された。この追加部分にも明らかなように、本書の目的は、副題に示されている「古今東西の異端の発見と考察」である。その主たる目的はキリスト教異端の紹介にあることはもちろんだが、まず巻頭にはアジア、次いでアメリカ大陸、アフリカの宗教が紹介されているように、宗教百科な体裁を保っている。ここでは、日本の宗教がどのように記述されているか、増補版である第2

²³ *Ibid.*, pp.915-6.

²⁴ Alexander Ross, *Pansebeia: A View of All Religions in the World*, London, 1653.

版をもとに紹介しよう。

日本の宗教も、南アジアの宗教と類似のものと映ったようで、儀礼・儀式の違いであると定義される。しかし、イエズス会のたいへんな努力でキリスト教も足跡を残したと記され、イエズス会を評価している点が興味深い。馬や台車に乗せて行進する祭が多く行われる、というのは現在でも日本の祭の基本的な形であろう。多くの修道院や学寮がある、とするのは、比叡山や高野山、禪宗寺院などのことを意味すると思われる。多くの神が各々の極楽世界を持っていて、各々の信者はその極楽に迎えられと信じられている、という説明は、当時の日本人の多元的な来世観——同じ仏教でも、宗旨が違ふと異なった極楽へ向かうと考へた——²⁵を捉えている。また、仏教に関しては、自らの命を捨てるといふ行為に強い関心が向けられている。

「多くの人びとが自ら入水し、また、自ら喉を切り裂く者もいる。高い塔から投身し、首を折って死ぬ者もいる。狡猾で強欲な祭司が、それを勧めるのである。かれらは、こうした行為で少なからざる利益を得ているのだ。〔土中に埋められて〕細い竹筒だけで息を吸い、断食し、死に至るまで祈り続ける者もいる。奇妙にも、高い岩山から人の体を突き出してぶら下げ、告白を強制する祭司もいる。悪魔〔「天狗」を意味するか〕のような扮装をした行人〔山伏のことか〕が人びとを岩崖からぶら下げるのであるが、〔落ちたなら〕体はバラバラになる。人びとが戸口に無数の提灯をともし、夜中、最近亡くなった友人の魂と会うために通りを行き来する祭がある。死者の魂の前に食べ物や飲物を供え、死者の魂を家の中に迎える。」²⁶

ロスの情報源は、マフェイなどイエズス会士の書簡であつたことは明記されている。即身仏や大峰山の修業、お盆の行事などが、かなり客観的に紹介されているが、ロス自身のコメントはとくに加えられていない。キリスト教の世界観からすれば、あまりに異なつた世界であつたのかもしれないし、異端を集成した書物という性格上、こういった異教を肯定するという意図はもともと皆無であつたわけで、個々の事例に批判を加えてはきりが無いということもある。ただ、那須敬の研究によれば、ロスの著作の歴史的意義は、こうして客観的に事例を並置したことが、著者の意図を越えて、結果的に宗教の相対化への

25 Ross, 2nd ed. (1655), p.88.

26 *Ibid.*, p.89.

道を開くことになった点にある。²⁷これは、同時期のヘイリンが主観的に日本の事象を利用したのとは対照的である。

同じく宗教的な背景を持ちながら、両者の相違の意味するところは何だろうか。これだけの検証で答えを出すのは避けた方が良いが、その後の、啓蒙主義的な史論と歴史事象に優劣を認めない歴史主義という、二つの歴史理解の潮流の萌芽という理解も可能かもしれない。

また、ヘイリンの著作は、その個性的な価値判断に特徴があるといえる。本稿では、彼にとっては異世界であった日本の事例を取り上げたが、もっと身近なヨーロッパ世界、自らの国イギリスなどを、ヘイリンがどのように捉えているのかも興味深い点である。今後の課題としたい。

* * *

ヘイリンの『コスモグラフィ』以降、1670年にはモンタヌスの『日本誌』の英訳版が刊行され、オランダ経由でも日本の情報が伝わったと思われるが、イギリス人の意識の中でリアルな世界地図に日本をつなぎ止めるにはいささか情報が不足していたのかもしれない。スウィフトの『ガリヴァ旅行記』（1726年）の第3部は「ラピュタ、バルニバービ、ラグナグ、グラブダブドリップ、および日本への渡航」と題され、わざわざ日本の名前が挙げられているが、記述は章の末尾に、ガリヴァがヨーロッパへの帰還のためにオランダ人を装って日本を訪れ、将軍に謁見して踏み絵の免除を願い、長崎から帰国の途についたという「後日談」が記されている程度である。もっとも、第3部の冒頭に登場してガリヴァの船を襲う海賊の船長は日本人であったという設定は、鎖国以前のアジア海域のイメージを反映しているのだろう。つまり、空想の世界であるラピュタなどと現実の世界をつなぐ、半ばファンタジーの世界として日本が用いられたといえる。日本がイギリス人の現実の世界に立ち戻るには、まだかなりの時間を要するのである。

27 那須敬「17世紀イングランドの異端学と宗教の複数性」『西洋史学』219号（2005年）。